

現代語版『小説神髓』（九）

坂井 健

はじめに

『小説神髓』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強すべきだというのは、なるほどそのとおりだとは思いうけれども、実際に、『小説神髓』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ない。とくに、この本を読んでほしいと思う、大学二、三年生ではほとんどいまいといてもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髓』の現代語訳をすることにした。訳にまぢがいや不適切な表現があるかもしれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙選集』（中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月）、岩波文庫『小説神髓』（宗像和重解説、二〇一〇年六月）に詳細な注があるので、ここでは最小限にとどめた。また、柳田泉『小説神髓』研究』（春秋社、昭和四一年）に詳しい解

説がある。これらの先行研究にはさまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。柳田氏の著作には、本文の解釈に相当する部分があるが、本稿では、なるべく直訳を心がけた。

日本近代文学大系は、『逍遙選集』別冊第三を底本とし、初版本（松月堂、明治一八〇九年）を参照したとある。なお、柳田泉氏による岩波文庫本に初出と『逍遙選集』の異同についての注記があるほか、宗像和重氏の解説本は、『逍遙選集』を底本として、初出との対照表をつけている。

本稿では、若き日の逍遙の口吻を髣髴とさせたいと思い、初出本に拠った。本稿は、『小説神髓』を原文のままに理解したくても、できずにもどかしがっている初学者を念頭において訳したものである。

(前号よりの続き)

それなら、どのような文章がこの文体の本質であるかというところ、『八犬伝』、『美少年録』などは、この文体で書いたすぐれた小説である。ここにその抜き書きをあげる。読んで、その全体を推し量ってほしい。

○この眉の上のほくろさえ一対なるは親子のしるし。この子の顔と御身の顔立ち、似ずや似ざるや見給え、と言いつつ、鼻紙に付けたりし懐中鏡を取り出して、照らして見せつ。推し向けて、珠よそなたの父御(ててご)ぞや、抱かれ給え、と搔いやれば、まだいわけなき珠之助も争い難き血筋の恩愛、父様(とときま)のう、と呼びかけて縋るをやがて引き寄せて膝にのせたる瀬十郎、歎かばこそあれ、目に脆き涙か、露の一滴云々(美少年録)

(この眉の上の黒子でさえあなたと一対であるのは親子のしるしです。この子の顔とあなたの顔立ちとが、似ているか似ていないか見てごらんさい、と言いながら、鼻紙袋に入れていた懐中鏡を取り出して、写して見せて、子供をその方に無理やり向けて、珠よ、お前のお父さんだよ、抱っこしてもらいなさい、と近くに寄せてやると、まだ幼い珠之助も、争うことのできない血筋の恩愛ゆえに、お父さん、ねえ、と呼びかけて縋りつくなを、すぐに引き寄せて膝にのせた瀬十郎は、歎きはしたけれど、目に脆き涙か、露の云々)

○さらばといわん。こういうて身の憂きことをつげの櫛鬢の後れ

毛かきあげて、人待つ縁の夕化粧鏡も刀自に借り物とうち向かえども、影暗き日は入り果てて、灯火のここに届かぬ片心、かかる為にと貯えの座敷の残りの蠟燭も流れ渡りの身にしあれど、よろずよき日と曆手の茶碗を覆す糸底にたてて彩る口紅の笹色も香も知る人に見せなんとこのわざなり云々(同上)

(そうすれば、ああも言おう、こう言つて、身の上の辛いことを告げようと思ひながら、その「告げ」ではないが、つげの櫛で鬢の後れ毛をかきあげて、人を待ちながら縁側で夕化粧鏡をみる。その鏡も、奥様からの借りたものだと思ひながらそれに向かうけれど、顔が暗くてはつきり見えないのは、日がすっかり暮れてしまったのに、燈火の明かりがここには届かないからだ。こんな時のためにと思つて、貯えて置いたお座敷の蠟燭がとけて流れて出した。そのような、渡りものの自分の身ではあるけれど、何につけても縁起の良い日であると、曆手の茶碗をひっくり返し、その底に溶かして彩る口紅の青味のかかった紅は、色も香も知る人に見せたいとすることなのだ云々(同上))

○客もあるじも下戸ならねば、これより酒盛りはじまりて、さしつ押さえつ果てしなき議論に興を催したる、朱之助ははやほろ酔いの、多弁に任してこの頃の憂さをしかじかとうちかこちて、仲人の目の前にてこういえばおかしからぬぶはむきに似たれども、姑の明けても暮れても苦虫を噛み潰して、四角四面の気ぐらい高く、斧柄(おのえ)もまた鳥とともに起て糸を繰り機を織る。これより外に所作はなし。今様早唄こそ事ふりにたれ、

説教弄齋柳節を習いたりやと問えば、知らずと答う。まして昨日今日は田舎までも弄ぶ三線などは、手で弾く物やら足でかきならす物なるや、夢にだも見たることはあらず。たまさかにものいいかけても、泣きだしたげなる面持ちして返事をするのみ。余情もなく、寝るときだにも三つ指にて「許させたまえ」といいながら、蒲団の端に怖そうに枕引きよせて就寝（ねまる）なり。畢竟木彫りの人形と枕をならぶるに異ならず。斯ても夫婦というべきや。小糠三合持つならば、入り婿になりなり、といいいけん。昔の人の格言なるかな。察したまえ、と侘しげに、意中をつくす酒興の述懐。箭五郎（やごろう）呵々とうち笑いて、のたまう趣無理ならねど、世のことわざにも石の上にも三年ということあるならずや。さりとして貴所は入り婿にして、また世の入り婿に同じからず。今にもあれ主用をはたしたまわば、袖うち払うて武蔵へかえりたまわなん。然らば、ここもなお旅なり。つまる所は、趣のなき銜妻を旅寝の当分、月雇にせしなりと思いたまわば不足はあらず。しばらく堪忍したまえかし、といえば、奥手もうち笑いて、斧柄さまのおぼこなる、そはそはのほすのことに侍り。焦げたる桐も作らねば良き琴にはなり侍らず。煤けし竹も伐りてこそめでたき笛になるとかいう諭えをおなごのしつけ方にて見しことの侍りにき。斧柄さまもしかぞかし。気長く仕込みたまいなば、ついには良き音をあらわして、暁ごとに臥所の窓の隙よりしらむを諸共に、いとしみつつ離れかねぬる、楽しき中になりたまわん。そを教えずして備わらん

ことを求めたまうはおろかにこそ。さはあらずと慰むれば云々（同上）^⑦

（客も主人も下戸ではないので、これから酒盛りが始まって、杯を交わし合い、果てしない議論に興を催した朱之助は、はやくもほろ酔い気分が多弁になるのに任せて、この頃の面白くないことをあれこれと愚痴をこぼして、仲人の目の前でこんなことを言うのは面白くなく、不適當なことのようであるけれど、姑が明けても暮れても、苦虫を噛み潰したような顔をしていて気が高く、斧柄もまた烏とともに起きて糸を繰り、機を織る。これより他にはなにもしない。今様^⑧、早唄^⑨は古びてしまったが、説教^⑩、弄齋^⑪、柳節^⑫を習ったかと聞くと、知らないと答える。その上、近頃は田舎でも楽しんでむ三味線などは、手で弾くものやら足でかきならすものやら夢にさえも見たことがない。たまに何かを話しかけても、泣き出しそうな顔つきをして返事をするばかりである。何の味わいもなく、寝るときでさえも三つ指をついて「お休みなさいまし。」と言いなながら、蒲団の端に怖そうに枕を引きよせて寝るのだ。結局、木彫りの人形と枕を並べると変りはない。それでも夫婦ということができようか。小糠三合持ったならば、入り婿にはなるなといったとか。昔の人はいいいことを言ったものだ、察してください、と侘しげに、心の中をもれなく訴える酒の席で興に乗じた述懐である。箭五郎は大声をあげて笑って、仰ることは無理もないが、世のことわざにも石の上にも三年ということがありませんか。そ

うはいつでもあなたは入り婿であつて、また、世の中の入り婿とは同じではない。今にもご主人の御用をお果たしなつたらならば、袖を止めるものを振り払つて武蔵へお帰りになつたらよいでしょう。ですからここも旅なのです。結局のところ、面白い女を旅寝のあいだ月雇にしたのだとお思ひになつたら不足はないでしょう。しばらくは我慢をなさい、という、奥手も笑つて、「斧柄様がうぶでいらつしやるのは、それはそのはずのことでございます。焦げた桐もちゃんと拵るのでなければよい琴にはなりません。煤けた竹も切つてこそ素晴らしい笛になるとかいう喩えを女子のしつけ方の本で見たことがございました。斧柄様もそのとおりですよ。気長に教育なさるなら、ついには良い音を出して、夜明けごとに臥所の窓のあいだから朝の光がさすのを、いっしょに残念に思つて離れることのできない、楽しい仲におなりになるでしょう。それを教えないで、備わつていないことをお求めになるのは、思いやりがありませんよ。そうではありませんかと慰めると」云々。(同前)

○昨夜(よんべ)はなせし事により、我身(わがみ)は只今里長(さとおき)どのの宿所へ行かん、葛籠なる衣物(きぬもの)を出したまいね、というに、斧柄は心得て、取り出だしつつもて来ぬる手織り小袖の染め紬絹、太織は名のみ瘦衣(やせじし)に、帯の端さえあまりぬる、真(しん)と辛苦をやる瀬なき、表衣(うわぎ)ばかりを脱更(ぬぎかえ)て、繕いのなき白足袋も、水入らずなる親子なか、脱し旧衣(ふるぎぬ)たたむ間

に、鼻紙折て懐へ、これもとわたす印章を、取りておさむる袖頭巾、ひさげて朱(あけ)どのたのむぞや。斧柄留守を、といいつつも、背門(せど)よりいでいきにけり。(中略)落葉はやくかえり来て、朱どの斧柄も歎びたまえ、那(か)の一種(ひとくき)は手に入りなき。委細は後に辛度や、というをさこそと朱之助、斧柄も共に慰めて、汲みてすすむる一柄杓、立茶(たてちゃ)の泡のあわれげに、恩義のために使わるる、親さえ子さえ暇なき、心尽くしを心ある、人に見せばや津の国に、ありというなる武庫の山、婿に栄なき空花(あだばな)の、散りぞしぬべき入相の、山寺の鐘おとずれて燈点頃(ひともしごろに)になりにけり。云々(同上)¹³⁾

(「昨晚話したことがあるので、私は今すぐ里長どのの宿舎へ行きます。葛籠の中の着物を出しておくれ。」という、斧柄は心得て、取り出して持ってきた手織り小袖の染め紬は、太擦りとは名前ばかりで、落葉は瘦せ衰えている。落葉は、帯の端さえ余つてしまつて、その帯の芯ではないが、真に苦しくやるせない思ひで、上着だけを脱ぎ替えて履く、繕いのない白足袋も、水入らずの親子の仲と同様である。脱いだ古い着物を畳むあいだに、鼻紙を折つて懐に入れ、「これも」と渡す印章を、取つて袖頭巾の中におさめ、それをひっさげて「朱どの、頼みますよ。斧柄、留守を」と言いながら、裏口から出て行ったことである。(中略)落葉は早くも帰つてきて、「朱どの、斧柄も喜んでください、例の品は手に入りました。詳しくは後で、ああ

苦しい」、というのを、さぞかしと、朱之助、斧柄も共に慰めて、汲んで勤める柄杓一杯の、お茶を立てる泡でもないが、哀れにも、恩義のために使われる、親にも子にも休む間もない、心尽くしを心ある、人に見せたいものだ。摂津の国にあるという武庫の山ではないが、婿には引き立ったところもなく、無駄な花が散ってしまうように、日暮れ時の、山寺の鐘が鳴ったように思えて、灯をとす頃になったことだ云々(同上)

○兼頭(かねあきら)卿も賢房(かたふさ)卿も共に名残を惜しませたまう。愛顧は筆にあらわれたる、そが中に兼頭卿の消息に、今より四年(よとせ)さきつころ、緑巽亭(りよくそんてい)にあだまちさせしは紅葉見(もみじみ)ならで、ものいう花を手折れといわぬばかりなりしわが過ちこそ悔しけれ。今さらに恨みられやせん、鈍(おぞ)ましかりきと書かせたまうを見れば、顔まず赧(あか)うなりしを、さらぬさまにてさやさやと、手早く巻きて懐にうちおさめ、今にはじめぬ両卿のおんなさけこそ辱(かたじけな)けれ。云々(同前)¹⁴

(兼頭卿も賢房卿も、共に名残をお惜しみになつて、かわいがる気持ち、筆に現れている。その中に兼頭卿の手紙に「今から四年前、緑巽亭に待ちぼうけをさせたのは、紅葉見物ではなく、物を言う花を手折れと言わんばかりであつたが、私のまぢがいが悔やまれることだ。今さらに恨まれるのではないかと、恐ろしいことだ。」とお書きになるのを見ると、顔がまず赤くなつたのだが、何気ないような様子でさらさらと、紙に巻いて懐に

おさめ、「今に始まつたことではない両卿の情けこそ忝いことでございます。云々(同上)」

上に掲げた文のようなものは、わずかにこの文体の一部に過ぎない。まだ全貌をうかがうに足りるはずもないけれど、その性質が他の文体と異なっているわけは、すでに明瞭に表れていると思われる。前にも言つたように、この文体の文は、地の文を綴るには、雅語七、八分をまじえ、台詞を綴るには雅語五、六分をまじえるので、地の文と台詞との間に、はなはだしい文の調子のちがいもなく、ひたすら筆先の加減によつて貴賤老若男女の言葉をかき分けるのに便利が多い。だから、上流、中流、下流社会の風俗を叙述するのにも、遠い昔の情景を写すのにも、もつとも適した好文体は、すなわち、この性質の文章であろう。読み本体の雅俗折衷の文を論ずるにあつて、自然と言わなければいけないことが、二つ、三つある。いわく、音韻転換の法、いわく、意義転換の法、いわく、古詩歌引用の法、いわく、題目構成の方がすなわちこれである。

音韻転換の法は、長歌の枕詞より転化した法で、すでに一つの意義を言い表した上に、言葉の後半をかりて、また、下の言葉の前半を言い表す方法である。たとえば、左の文では、

○さては命は浪速江の短き芦の薄命(ふしあわせ)あわずなりし

をうらめしの近江とはたが名づけけん。さして行方は磨り針の糸[○]。いとものはかなや叔母夫(おじご)さえ、なき名聞かして後々に

物思えとやつれもなき云々(『美少年録』斧柄が愁嘆の言葉¹⁵)

(それにしても、命は浪速の「な」ではないが、無くなつてしまふのだろう。浪速の入り江にある芦の節のように短く、不幸せで、会うこともできなくなつたのに、¹⁶近江の「あう」のは、誰が名づけたのか。うらめしいことだ。これから指して行く行く先は、摺針峠の針の糸の「いと」ではないが、¹⁷いとも果敢ないことである。叔父様さえ、死んでしまったものと伝えられて、後々に思いやれということだが、つれもなきことだ。云々)

脇に示したように音調を転換(掛けことば)させたところが非常に多い。思うに、筆を省略する一つの方法なのである。たんに技巧を求めるためにだけ使つたのではないだろう。そうとはいつても、初心の作者はこのあたりの道理を悟らないのであろうか。音調の転換はぜひとも行わねばならないように心得ているものもあるけれど、けつしてそれほどまでに必要なものではない。だからといって、少しもこの方法を使わないならば、文ばかりがいやに長々しくなつて、読むのに興がなく、そのうえ、色も香もない文章となることがある。だからといって、使わなくてもいいところに、下手くそな掛詞をわざわざ使うと次のようになる。

「年は二八か二九からぬ」、様子は何か白紙の、「奥の一間へ入相の」、「なんとせんかた涙のみ」

浄瑠璃本などにありふれていて、女子供にも耳慣れた、実に下手くそな掛けことばを得意顔に書き綴るのは、まことに嫌なものだ。かえって、素直に書いたものよりも劣つていて、醜い。

意義転換の法は音韻転換の法に似ていて、少しちがつている。意義転換の法では、音韻が似ているか似ていないかに関わらず、もし前後上下の言葉の意味が似ている言葉によつて言い表すことができると思ふときは、筆を曲げてでもそうした文字を選び用いるのである。¹⁸たとえば、左の文で、

消にし人は六の花七か八才を一期としけん云々

「六の花」は「消にし」といったことから転じて来た言葉であつて、ふつうならば「雪」とはつきりというはずのところなのだが、また、意義転換の法を使おうとするので、わざと「六の花」といつて、下の「七か八才」を効かせたのである。これらも所によつては、省筆の助けとなることはあるが、だいたい文の彩りを添えようとするに過ぎない。

(以下次号)

〔注〕

(1) 『八犬伝』・滝沢馬琴『南総里見八犬伝』(二八一四〜一八四二)読本。八つの玉を一つずつ持った、犬にちなむ名を持った八人の若者の活躍を中心に描かれる。

(2) 『美少年録』(びしょうねんろく)・滝沢馬琴『近世説美少年録』。毛利元就と陶晴賢との戦いをもとにした歴史小説。

(3) 文体の紹介なので、文の調子を知ってもらうために、訳すまえの原文も併せてあげる。ただし、読みやすいように、仮名づかいは現代仮名遣いとし、漢字は一般的なものに改め、句読点を付けた。意味については、あわせて現代語訳を付けた。

(4) 『近世説美少年録』第六回、夫のある美人の歌舞伎女お夏が、関係を結んだ美男の瀬十郎に、実は瀬十郎の胤である珠之助を引き合わせる

場面。

- (5) 『近世説美少年録』第十四回。旧縁があるという、訳ありげな武士の訪問を受けたお夏が、武士が帰ったのちに武士の素性について思いを巡らす場面。
- (6) 曆手の茶碗（こよみでのちゃんわん）・三島曆の曆を文様にした茶碗。前の「よろずよき日」との関係で、吉日を引き出す。
- (7) 『近世説美少年録』第二十三回、主人公の朱之助がたまたま助けた美女斧柄と夫婦になったのはいいが、姑は堅物で、嫁はまるでうぶで話にならないと、知り合いの夫妻にこぼす場面。
- (8) 今様（いまよう）・もともと平安時代から鎌倉時代に流行した歌謡を指すが、ここでは、当世風の歌謡の意味。
- (9) 早唄（はやうた）・早歌（そうが）とも。鎌倉時代に始まった宴会の歌。
- (10) 説教（せつきょう）・説教節（せつきょうぶし）のこと。鎌倉時代に起こった語り物の芸能。
- (11) 弄齋（ろうさい）・江戸初期の音曲師、弄齋が流行させた歌謡。のち、京都六条の遊女が流行させたともいう。
- (12) 柳節（なぎぶし）・近世初期京都島原遊郭で起った流行歌投節（なげぶし）の古称。
- (13) 『近世説美少年録』第二十六回。落葉が娘のように育ててきた斧柄の危機を救った朱之助に恩義を感じ、婿にしたのはよいが、その後、失敗続きの朱之助のために金策に走る場面。
- (14) 『近世説美少年録』第六回。上京した瀬十郎が懇意になって引き立ててもらった兼頭卿と賢房卿が、周防へ召喚される瀬十郎に、手紙を託す場面。「緑巽亭云々」は、かつて緑巽亭で二人が瀬十郎とお夏の悪縁を結んだことを指す。
- (15) 『近世説美少年録』第二十二回。危難を朱之助に救われた斧柄が、実の父と姉の死を死んで嘆く場面。
- (16) 「浪速瀉のみじかき芦のふしの間もあはでこの世を過ぐしてよとや（伊勢『新古今集』」を受ける。もとの歌の意味は、「浪速瀉の芦の短

- いふしの間のように、短い間もあなたは私に逢わないでいなさいとおつしやるのですか」という恋の恨みを述べた歌である。「浪速江」は「浪速瀉」に同じ。命は、浪速江の「な」ではないが、無くなってしまつて、その足の短いふしの「ふし」ではないが、ふしあわせで、会うことができなくなってしまった、ということ。前半の「命は浪速江の」で、「命は無くなってしまった」という意味を表し、後半の「みじかき芦のふしあわせ」を引き出していることを指す。
- (17) 「摺針峠」は、中山道、彦根市の峠。「針」から「糸」を導き、「いと」とかける。
 - (18) ここでは、ふつうなら「消えてしまった雪」というところを、「雪」を「無くなってしまった花」という意味の「無の花」といいあらわすことによつて、「無」と「六（む）」とを通じさせ、次の「七か八」を導かせているということ。

〔付記〕

本稿は、江蘇省社会科学基金「坪内逍遙文論中的中国文化要素研究」（蘇州大学、研究代表者 潘文東、二〇一六～二〇一九年）による成果の一部である。

（以下、次号）

（さかい たけし 日本文学科）
二〇一九年十月三十日受理